

● シリーズ 私の見た日本 Vol.195

日本における心ほどける空間

方 其偉 (ホウ・キイ)

2013年台湾私立華梵大学建築学科卒業後、2014-2016年仙台日本語学校、2017-2019年宮城大学大学院空間デザイン専攻。2020年NENGO工務店入社。現在に至る。



2014年、日本の現代建築や社寺建築に憧れていた私は、それまでの仕事を辞めて日本に来ました。この6年間の大半は仙台に住んでいたのですが、まずは東北の生活からご紹介いたします。次に癒しの空間である神社仏閣と京都の町について、最後は、自閉症の方を対象とした「芸術治療のコラージュ」を用いた居住空間の設計について述べさせていただきます。

6年前、私は仙台で暮らし始めました。当時は、まだ東日本大震災の傷から回復できていない様子でした。「定禅寺通り」という大通りがあり、震災前までは「歩きやすい」「おしゃれな店が多い」という印象の場所に過ぎませんでした。震災後わずか3年の間に、「東北頑張り」のメッセージをあちこちで目にする、皆を励ます場所となっていました。

最初に住んでいたのもこの通りに近いアパートでした。木造建築だったので、冬はとてつもない寒さでした。台湾にいた時は寒いといっても気温は3℃程度でしたから、-2℃を体験したのも、雪が舞い落ちるのを見たのも仙台が初めてでした。台湾では高い山にしか雪が降らないので、街中でも雪が見られる生活ができることを知ってドキドキしたものです。

仙台は都市化が進んでいると感じましたが、東京と比べると遥かに住みやすいと思っています。仙台は東京のように高層ビルが林立していないし、大部分が駅周辺に集まっています。大通りにはたくさんのイチョウが植えられ、緑も多く、昔から「杜の都」と呼ばれています。12月ともなると、「定禅寺通り」のイチョウ並木には数々の小さなライトがかけられ、クリスマス前後は「光のページェント」と呼ばれるイルミネーションが行われます。日本には様々なイベントや祭りがあって、それぞれに特徴がありますが、今の自分にとっ

ては、どれも当たり前前の出来事となっています。伝統的な祭りだった場合は特に魅了されて、外国人の友だちとよく一緒に見に行きました。台湾にいた時にはなかった特別な経験でした。

日本に来てからというもの、神社に行くようになってきました。理由の一つは、「精神のリリース」です。鳥居をくぐると、心が解放されたような感じがします。神社は、神様の居場所として考慮され設計されています。神社内の道は神様の道であり、人間は中央ではなく道の両側しか歩けないというルールです。参拝の道はいつも幅が広く、自然も豊かで、道を歩くとフィトンチッド(樹木が放つ化学物質。森林浴により癒しや安らぎを得られる)が吸収できるので、毎日の生活でため込んだ緊張を緩和するために、ちょくちょく出かけます。

また、京都もよく訪れる都市です。古都と呼ばれる京都には、日本で最も多くの神社仏閣がありますから、外国人が伝統的なものを味わいたい時に京都を選ぶのは当然のことだと思います。

昔から神社に参拝する時は、人々は表参道という道に誘導され本殿へと向かいますが、現在では、ほとんどの表参道が主要道路に取って代わりました。神社の多い京都でも一部主要道路になったのですが、道路の幅が広いので、建築の高さと道の広さが相まって、美しく開放的な比率をつくり出しています。京都の建築基準法により、一般的な建築高度制限は15~20mの間で、駅周辺は25~30mの間とされています。一方、主要道路の幅は22~24m、駅前の主要道路は広く、50mまでと制限されています。道路の幅と建築の高さの割合は5:7~5:6で、黄金比に近い比率です。どうりで、私が京都を歩く時には、都市で感じる圧迫感がないわけです。

修士論文のテーマを決めるきっかけになった出来事があります。2015年7月に偶然、精神病院を見学するチャンスを得ました。その体験は、私に大きな影響を与えました。その病院では、医師が患者に襲われる恐れがあるとして、両者の間にはガラス板が設けられていました。この空間にいた私は息すらしにくいと感じ、活気のない治療の場にもずっと疑問を抱えていました。「こんな空間にいて、本当に患者の心が回復できるのだろうか」この疑問が発端となり、私は研究で答えを見つけようと思いました。論文の対象は自閉症の方です。コラージュを使うことによって、対象者が居住空間にどのような思いをもっているかを引き出すのが目的でした。コラージュをとおして、人が潜在的にどのような居住空間を欲するのかを理解できれば、自分の居住空間にいながらして自然にストレス解消ができるかもしれないと思ったからです。自閉症の方はソーシャルスキルに問題があるため、将来自分がほしいと思う空間があったとしても、うまく説明することは難しいと考えられます。芸術コラージュを用いれば、彼らの優れている空間才能を引き出すことが可能となり、少ない言葉でも彼らの要求を理解できるのではないかと考えました。コラージュを使って、クライアントと話し合うことは別に斬新な方法というわけではなく、現代建築の啓発活動の時代に、建築士がコラージュを使ったことがあり、現在でも建築士の連健夫氏が使用されています。私は自分の研究で、自閉症の方たちが思い描く空間を理解することができましたが、同時に現代の公共空間は、彼らの要求を満たしていないこともわかりました。公共空間において発生する彼らのパニック状態の原因はさまざまですが、光、音、人が着る服の色、壁の色、空間の尺度などが要因となる可能性があります。自閉症の方は空間に

対する感受性が敏感であるため、「光すら要らない」「1つのライトだけで十分だ」という人や、自分の居住スペースを保ち、他人が入るのを許さない人もいます。しかし、実際の居住空間は彼らのニーズを満たしていないため、いつの間にかストレスが溜まってしまうのだと思います。

空間に対するストレスは人それぞれですが、生活にしろ、職場にしろ、居住空間にしろ、ストレスが積み重なることを無視してはいけないと思っています。生きるうえでは必要なストレスもあると言われますが、自分が身を置く空間から感じるストレスは、なるべく少ないほうが良いと思っています。古くから、日本の神社における空間が人々の精神を癒してきたように、居住空間でも同じように癒しの空間を再現できないかチャレンジしたいと思っています。コラージュを用いることにより、クライアントの思いを共有し、ストレスが解消できる空間を設計することが、今の私の目標です。



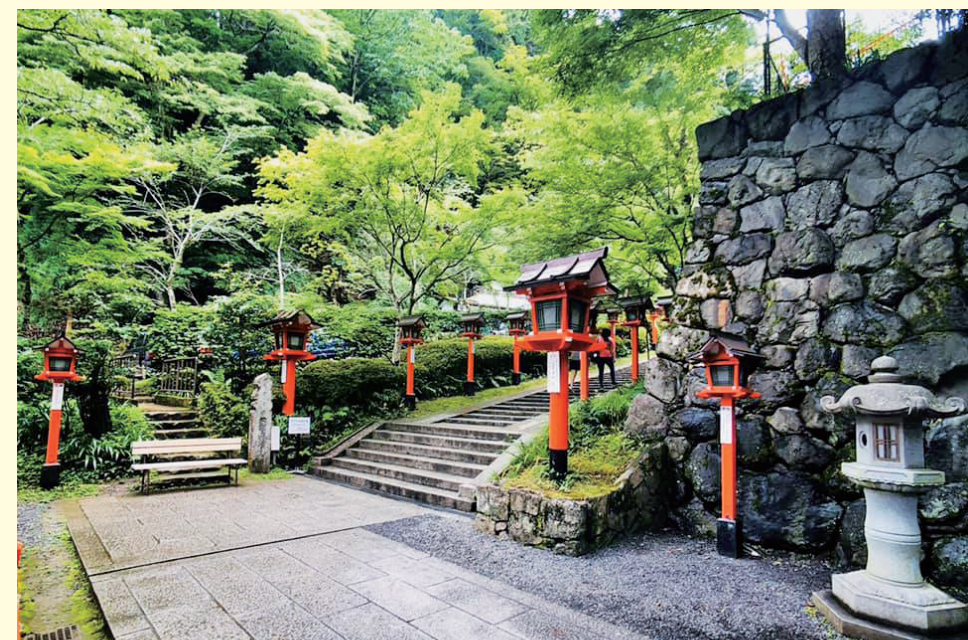
左上/自閉症者の思う「家」のコラージュ
左下/普通の大学生が作ったコラージュ



仙台のアパートから見る景色



光のページェントと呼ばれるイルミネーション



京都鞍馬寺の入口



京都宇治の街並み